

保存の はなしをしよう。

32 作っただけでは終わらない

作品を守っていく仕事を支えてくれる、さまざまな道具があります。それらは美術館や博物館専用に開発されたものとは限りません。例えば食品工場などの厳しい環境管理のための道具が、美術館や博物館でも使われることがあります。

そのひとつの例が、屋外から虫が入れなくするために、扉の隙間を埋めるブラシです。このブラシは当館でも2015年から使っていて、今では文化財の保存について研究する機関「公益財団法人 文化財虫病害研究所」による、害虫の侵入を防ぐ安全で有効な器具としての認定も受けています。

外からのさまざまな生き物の侵入を少なくすることが、館内の環境を良くしていくための最初の手段であり、隙間用ブラシは効果的です。扉などの隙間から入ってくる虫全体の数が少なくなれば、それらの虫のなかの作品に害を与える文化財害虫の数も低くおさえることができますし、殺虫などのために薬剤を使う機会を少なくすることができます。また、土壌由来のカビが含まれている土埃が隙間から館内に入る量も抑えられます。当館では以前から、家庭でも使われているパッキンや隙間風をふせぐためのシールなども活用していましたが、耐久性やサイズに不足

シャッターブラシを観察する
ブラシ製造元の皆さん

があることも少なくありませんでした。

そして導入した業務用ブラシは丈夫で、設置から10年経った今でも現役です。この扉の下の隙間を埋めるブラシを導入したとき、シャッターブラシについても検討しましたが、当館のシャッターの形に合う既製品はなく、一度はあきらめました。しかし、これについても製造元にはさまざまな技術と経験があつて、当館でも使える試作品を考えてくれました。特別毛足の長いブラシで、シャッターの両側の隙間を埋め、光が漏れないほどにみっちり植毛されたものです。

先日、製造元の方々が、10年使われたブラシの様子を点検に来館されました。作るだけでなく、それが現場でどのように使われているか、どのように変化しているかを見て製品の改良や開発につなげるためです。その時に、私たちにできる日常のメンテナンスについても教えて下さいました。扉の隙間ブラシは、ペット用のすき櫛などを使って毛足につまった埃を取ればより長く使えるそうです。（植野比佐見）



MUSEUM CALENDAR

開館／9時30分～17時（入場は16時30分まで）
休館／毎週月曜日（祝休日の場合は開館、翌平日休館）

2025.7.12（土）～9.15（月・祝）

なつやすみの美術館 15 美術の歴史と歴史の美術
美術館に作品がある理由やその並び方について、考えたことはありますか？あらゆる世代に美術の楽しみ方を伝える展覧会の15回目は、歴史をキーワードに考えます。



高井貞二《エミгранトの街》1940年 当館蔵

2025.4.12（土）～2026.4.5（日）

MOMAW コレクション 現代の美術

「2025年日本国際博覧会（大阪・関西万博）」にあわせて開催。1970年、前回の大阪万博と同年に開館して以降、55年にわたる当館の歩みのなかで、「現代」という時代とともに培われてきた多様なコレクションを、何度か展示替えを実施しながら1年を通じてお楽しみいただきます。

吉原英雄《シーソー 1》1968年 当館蔵



シアトル・マクブライド・スタジオ
《ブロンズに寄る 保田龍門》
1920年 当館蔵



メールマガジン Facebook
X (旧 Twitter) ご案内

メールマガジンでは展覧会の情報はもちろん、講演会、トーク、ワークショップなど当館に関連するタイムリーなトピックスを定期的にお届けしています。当館ウェブサイトよりご登録いただけます。また Facebook や X (旧 Twitter) でも、最新の情報を発信しています。あわせてご利用ください。

友の会 会員特典いろいろ

1. 展覧会の無料観覧
2. 各種行事への参加（美術鑑賞ツアー、ミュージアムコンサートなど）
3. 展覧会のご案内、美術館ニュース、その他情報の配布
4. 版画の頒布会への参加
5. 当館ミュージアムショップでの割引
6. 館内カフェでの割引
7. ホテルアバローム紀の国、湯処むろべ、和歌山マリーナシティホテルでの割引



入会のご案内

一般会員 6,000円

学生会員 3,000円

ミュージアムショップにてお手続きいただけます。会員証即日発行。郵便振替でもお申し込みいただけます。詳しくは友の会事務局まで。
Tel. 073-436-8690 担当：中川

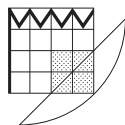
MOMA Wakayama

news

2025 n°123



谷中安規《文豪 佐藤春夫》制作年不詳 当館蔵
「佐藤春夫の美術愛」展より



清水登之

《ヨコハマ・ナイト》

をめぐって



図1 清水登之《ヨコハマ・ナイト》1921年 油彩、キャンバス 76.2×96.5 cm
和歌山県立近代美術館蔵

戦前の和歌山県からは、多くの人々が移民としてアメリカに渡りました。そのなかには、石垣栄太郎^{いしがきえいたろう} (1893–1958) や浜地清松^{はまじ せいまつ} (1885–1947)、ヘンリー杉本 (1900–1990) など、当地で画家として活躍した人物がおり、彼らも含めアメリカで学んだ作家たちの作品収集や調査研究は、和歌山県立近代美術館の活動のひとつの軸となっています。

石垣は、1915 (大正4) 年に西海岸から東海岸へと移動し、1950年代に帰国するまでニューヨークを拠点に活動しました。清水登之^{しみずとし} (1887–1945) も、1907 (明治40) 年に渡米して暫くはシアトルで活動していましたが、1917 (大正6) 年にはニューヨークに移動しています。そして2人とも昼間は働きながら夜間にアート・スチューデント・リーグという美術学校に通い、アッシュカン・スクールの画家ジョン・スローン (John Sloan / 1871–1951) に学びました。同時期に国吉康雄^{くによしやすお} (1889–1953) も同じ学校に通っています。こうしたなかで交流が始まり、その後はそれぞれの道を歩んでいくのですが、当時ニューヨークにはほかにも多数の日本人美術家たちが活動していました。グループとしてよく知られる「画彫会」^{がちようかい} (紐育日本美術協会を前身に1921年に改称) にも3人は関わっています。戦前のニューヨークにおける日本人美術家たちの詳しい動向については、当館も調査協力した佐藤麻衣氏の著書『ニューヨークの日本人画家たち』(六花出版、2021年) や、ニューヨーク日本人歴史博物館のウェブサイト^{*1} もご覧ください。そして、今回ご紹介する清水登之《ヨコハマ・ナイト》(1921年、76.2×96.5 cm) 【図1】も、この時期のニューヨークにて制作された作品です。

今年の冬から春にかけて、清水の故郷にある栃木市立美術館では、「没後80年 清水登之」(2025年1月11日–3月20日) 【図2】が開催されました。清水は20歳で単身渡米してからシアトル、ニューヨーク、パリなどで描き、1927 (昭和2) 年の帰国後は、戦時期の中国や東南アジアにも取材するなど、幅広い画歴を持つ画家です。生涯を通して、清水は、同一主題による作品を複数制作しています。展覧会は、時系列に沿って作品を追いながら、特にこの複数制作に注目して清水の画業を振り返るものでした。

横浜の夜の街を描いた当館所蔵の《ヨコハマ・ナイト》も、同一主題の作品が3点存在します。同展会場には、当館所蔵作品と、残念ながらパ

ネル展示でしたが、横浜美術館蔵《ヨコハマ・ナイト》(1921年、76.5×97.0 cm) 【図3】、神奈川県立歴史博物館蔵《横浜夜景》(1925年、116.8×91.0 cm) が並びました。

2点の《ヨコハマ・ナイト》は、ニューヨーク時代に描かれた作品です。一方、《横浜夜景》【図4】は、パリに渡った1925年7月に、一回り大きな100号キャンバスに描かれ、サロン・ドートンヌに出品されました。その後、事情により切断され、現在はおおよそ左半分の作品となっています^{*2}。

当館と横浜美術館に所蔵される《ヨコハマ・ナイト》は、ほぼ同一サイズです。構図やモチーフも、細部に少しずつ違いはありますがほとんどが同様に描かれており、それぞれの作品から受ける印象もそれほど差を感じません。それでは、2つのそっくりな《ヨコハマ・ナイト》は何故描かれたのか、ここではその事情について、現在知り得る情報を元にしながら書き記しておきたいと思います。

1919 (大正8) 年10月、清水は結婚のため一時帰国し、翌1920 (大正9) 年6月、新妻・澄子を伴いニューヨークに戻りました。この間、清水は知人



図2 「没後80年 清水登之」展チラシ



図3 清水登之《ヨコハマ・ナイト》1921年 油彩、キャンバス 76.5×97.0 cm
横浜美術館蔵

を見送りに行った横浜で、伊勢佐木町の賑わいを見物したり、写真を撮ったりしており、こうした横浜の街の印象を元にしながら、ニューヨークにて仕上げたのが《ヨコハマ・ナイト》です。スローンの影響もあり、チャイナタウンなど夜の街に生きる人々の様子を細かに観察した作品を清水はこれまでも制作していましたが、《ヨコハマ・ナイト》では、横浜という港町の夜の様子を、暗い海や山を背景に少し俯瞰した構図により描き出しました。画面には、酒場の賑いを中心に、着物姿の日本人や洋装の西洋人、交番で道を尋ねる人、人力車夫といった労働者など多様な人物が登場し、混沌とした港町の夜の雰囲気がいへんよく伝わってくる作品です。

清水は、日々の出来事を「日記」(公益財団法人 大川美術館蔵)に細かく記していました。清水の制作や生活を知る上で大変貴重な資料で、「清水登之日記を読む勉強会」によって現在、翻刻が進められているところです。「日記」を読むと、1920 (大正9) 年11月から1921 (大正10) 年1月にかけて、試行錯誤を重ねながら清水が《ヨコハマ・ナイト》を制作していたことがうかがえます。そして1921 (大正10) 年、《Impression of Yokohama》(横浜の印象) というタイトルにて出品した作品は、第5回独立美術家協会展 (1921年2月26日–3月24日) で話題となり、スローンと同じくアート・スチューデント・リーグの教師であったジョージ・ベローズ (George Bellows / 1882–1925) がこの作品を買いたいと申し出ています(「日記」2月25日)。その後、同作品は、アート・インスティテュート・オブ・シカゴにて開催された第34回アメリカ絵画彫刻展 (1921年11月3日–12月11日) に、ベローズの推挙(『紐育新報』8月3日付。清水は「誰が推挙したかは不明だ」[「日記」8月5日]としている)により招待出品されました(タイトルは、Impression of Yokohama)。しかし、同展の審査会では、賞金200ドルのオーガスタス・S・ピーボディ夫妻賞を清水が受賞することが一度は決定されたのですが、清水がアメリカ人ではなく外国人であるという理由によって取り消されてしまったのでした^{*3}。その後《ヨコハマ・ナイト》は、インディアナポリスのアート・アソシエーションにも招待され、シカゴから作品が送られて展示されます。それ以後《ヨコハマ・ナイト》の出品が確認できる展覧会は、画彫会の第一回展である「ニューヨーク市日本人美術家協会絵画彫刻展」(タイトルは、Yokohama

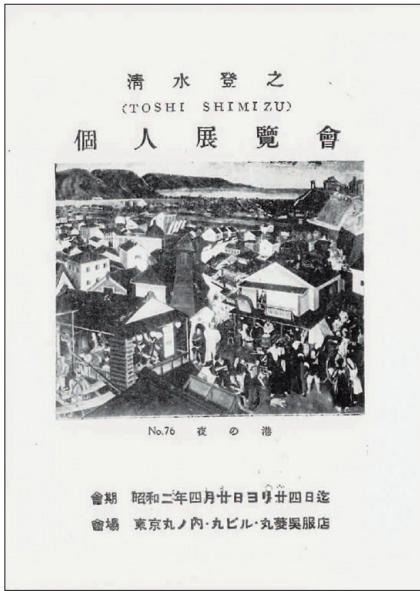


図4 『清水登之個人展覧会出品目録』(1927年4月20日–24日、丸菱呉服店)『清水登之関係資料』(東京都現代美術館図書室蔵)より。
＊表紙が《横浜夜景》(神奈川県立歴史博物館蔵)。切断される前、《夜の港》(1925)の題名で展示されている。

Night) (1922年11月1日–21日、シビック・クラブ)、清水登之個展(タイトルは、Yokohama Night) (1923年10月22日–11月11日、ブラマー・ギャラリー)となります。

さて、シカゴでの第34回アメリカ絵画彫刻展は、当初もっと早い日程での開催予定であったようです。1921 (大正10) 年7月8日の清水の日記には、アート・インスティテュート・オブ・シカゴから手紙が届き、7月30日から8月14日まで第34回展を開催するので作品(横浜の印象)を送って欲しいと依頼されたとあります。そして7月17日の日記では、「横浜港の印象を模写に取り掛かる、同じ様な事を繰り返すのは厭なものだ」と模写を始めています。8月の日記にも模写に取り組む記述を確認できますが、どうして清水は模写をすることになったのでしょうか。その理由は書かれていないので、想像するしかないのですが、アメリカ美術界のなかで評価された《ヨコハマ・ナイト》を、シカゴの展示に出品してしまう前に(実際には11月からの開催となりましたが)、模写して自分の手元に残しておこうとしたことや、またベローズが既に作品の購入を申し出ていたことも模写の理由として推測されます。

最終的にベローズが《ヨコハマ・ナイト》を購入したのは、再び日記によれば、1924 (大正13) 年1月のことでした^{*4}。1923 (大正12) 年12月11日に、清水は、アート・スチューデント・リーグでスローンに会い、2年前に《ヨコハマ・ナイト》を買ってくれると言ったベローズに話をしてもらおうよう頼みに行っています(「日記」12月11日)。その後、スローンが交渉を進めてくれ、ベローズは300ドルのみの支払いであれば作品を引き受けるということになり(「日記」12月13日)、年が明けて1924 (大正13) 年1月8日に、清水はベローズ宅にタクシーで作品を運んだのでした(「日記」1月8日)。同年5月に、清水は家族とともにパリに移ったので、その費用が必要でもあったと思われる。

2016 (平成29) 年度に購入した《ヨコハマ・ナイト》は、当館で初めて収蔵することのできた清水登之作品でした。そして、アメリカに残されていたこの作品に、ベローズの妻エマ・ベローズ (Emma S. Bellows / 1884–1959) 所有の来歴があることは重要でした。つまり、同作品はジョージ・ベローズの旧蔵作品だったのです。

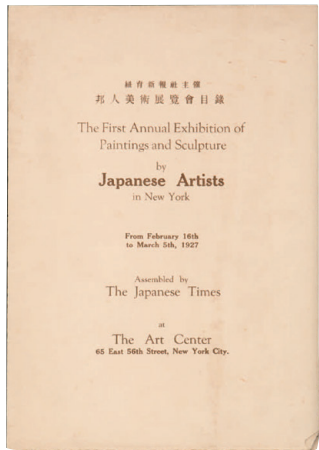


図5 「紐育新報社主催 邦人美術展覧会」(1927年2月16日-3月5日、アートセンター) 目録(表紙)、太地町立石垣記念館蔵

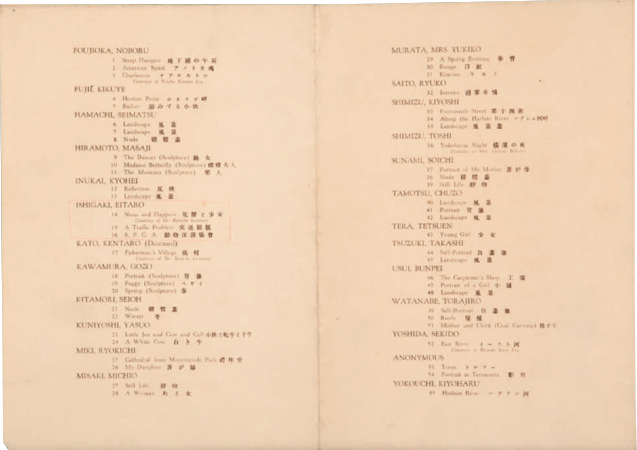


図6 「SHIMIZU, TOSHI 36 Yokohama Night 横濱の夜」 Courtesy of Mrs. George Bellows」と記載がある。



図7 画面左下にサインと年記(縦書き)「TOSHI SHIMIZU 1920」がある。



右の壁にゴヤの《ロス・カプリチオス》

佐藤春夫の版画愛

佐藤春夫の美術愛

2025年4月12日-6月29日

1927(昭和2)年2月より開催された「紐育新報社主催 邦人美術展覧会」(1927年2月16日-3月5日、アートセンター)に再び『ヨコハマ・ナイト』は出品されます。目録【図5・6】には、清水の出品作品として「Yokohama Night 横濱の夜」と記載されていました。注目すべきは、その下にある「Courtesy of Mrs. George Bellows (ジョージ・ペローズ夫人の協力による)」のクレジットです。ペローズは1925年に死去しているので、死後に夫人の元に残された作品が同展には出品されたのです。つまりこの出品作品が、清水がかつてペローズに売却した『ヨコハマ・ナイト』であり、現在の当館所蔵作品であるということがわかります。1927(昭和2)年1月に清水はパリから日本に帰国しているので、当然この時、ニューヨークにはいません。けれども同展の開催にはスローンも関わっていたので、スローンが出品の仲介をした可能性も考えられます。

横浜美術館所蔵作品、当館所蔵作品ともに、額裏等に作品を探る手がかりとなる書き込みや出品票などがなく、情報をなかなか得難いのですが、当館作品の画面左下あたりをよく見ると、横浜美術館所蔵作品にはないサインと年記があることがわかります。通常の照明ではほとんど読めないのですが、ブラック・ライトを照らすと、縦書きで「TOSHI SHIMIZU 1920」【図7】と書かれた文字を確認することができます。清水が《ヨコハマ・ナイト》を制作したのは、「日記」によると1920(大正9)年11月から1921(大正10)年1月にかけての時期なのですが、どの時点で「1920」と年記を入れたのかは判然としません。また、二重に書かれたサインの理由も、判断が難しいものではありますが、サインと年記があるという事実は認めることができます。

さまざま検討しましたが、当館所蔵作品の制作年は「日記」を典拠に1921年とし、タイトルは同様の作品が2点あることを示すため、横浜美術館と同じく『ヨコハマ・ナイト』としました。しかし、ペローズに模写を売却することは考え難く思われます。そして、清水自身、ペローズ旧蔵作品がアメリカから日本に里帰りするとは思ってもみなかったでしょう。清水が《ヨコハマ・ナイト》を、「同じ様な事を繰り返すのは厭なものだ」と言いながらも細部に至るまで描き、オリジナルとほぼ同様のクオリティに仕上げたの

は、やはり記念すべき出世作である自作を手元に残しておきたいという思いだったのかもしれません。

最後に、さまざまな資料をご提供いただいた栃木市立美術館杉村浩哉氏、「日記」調査にてお世話になりました大川美術館小此木美代子氏、清水登之の日記を読む勉強会、そして作品調査にご協力いただきました横浜美術館に感謝申し上げます。(奥村一郎)

註

- *1 「ニューヨークの日本人画家たち ― 戦前期における芸術活動の足跡 ―」
https://www.historyofjapaneseinny.org/jp/japanese-artists-during-the-prewar-period-in-new-york-city/
- *2 「塵埃にまみれ…画布に穴の開いている」状態だったので50号に張り替えている(「日記」1939年5月17日)。『没後80年 清水登之』栃木市立美術館、2025年、p. 30「18 ヨコハマ・ナイト」(解説)を参照。
- *3 “Chicago Overrules Jury and Bars Jap,” *American Art News*, November 12, 1921.『清水登之関係資料』(東京都現代美術館図書室蔵)より。
- *4 「日記」は、下記の翻刻も参照。ほか未刊行の「日記」を参照。
『清水登之展』図録(武蔵野市、1991年)所収の「清水登之日記」(1924年分のみ)
『清水登之 滞米日記と素描』展図録(財団法人大川美術館、1994年)所収の「日記より抜粋」(「畧誌」(自 明治四十年 至 大正五年)と「日記」(1917～1924年)の抜粋)
『清水登之、滞欧そして帰国後の軌跡』展図録(財団法人大川美術館、1999年)所収の「清水登之、年譜・日記(滞欧および帰国後)」(岡義明編、1924-1944年の抜粋)

参考文献：

『清水登之展』栃木県立美術館、1996年
『栃木県立美術館所蔵 清水登之』栃木県立美術館、2007年
『没後80年 清水登之』栃木市立美術館、2025年

和歌山県新宮市に生まれた佐藤春夫(1892-1964)は、1910年代から1960年代にかけて、文学の世界で大きな足跡を残しました。昨年度、当館はその春夫の手元にあった美術作品61件148点をまとめてご寄贈いただく機会に恵まれました。「佐藤春夫の美術愛」展は、それを記念し、寄贈作品の全体像を多くの方にご覧いただくことを目的に開催したものです。寄贈を受けるにあたり、まずは作品ひとつひとつを確認し、サイズなどのデータを取りながら、だれがいつ作ったという作品かを判別する作業を重ねました。その上で判明した作品情報を、春夫の著述や生涯と重ねると、その入手経緯や美術家、文学者たちとのつながりが少しずつ具体的に立ち現れてくることになりました。まだ詳細がつかみきれないことも残っていますが、展覧会は、寄贈作品を中心に据えながら、春夫と美術、また美術家との関わりがさらに具体的に見えるように、個人所蔵家からお借りした春夫の絵画作品や著作および書簡、また当館所蔵作品などを加え、「わがふるさと」は熊野の首邑新宮」「文学と美術と」「佐藤春夫の版画愛」「風船画伯とカンシャク先生 谷中安規と佐藤春夫」の4章にまとめました。その内容は展覧会に合わせて作成した32ページのパンフレットにまとめています*1。

さて、春夫が文学とともに、生涯にわたって美術に特別な関心を持ち続けたことは、その著作はもちろん、自ら絵筆をとって描いた数多くの絵画作品や、美術家たちとの親しい交流の様子から、これまでにもさまざまに指摘されています。当館でも、前身である和歌山県立美術館時代、春夫が亡くなった4年後の1968(昭和43)年10月に開催した「明治100年記念郷土作家回顧展」では、春夫の画家としての活動に着目し、油彩画1点を紹介しています。1970(昭和45)年に和歌山県立近代美術館として開館したのちも、1984(昭和59)年に開催した「和歌山の作家と県内洋画壇展〈1912-1945〉」では絵画作品を紹介。2002(平成14)年の「西村伊作の世界」展、2004(平成16)年の「ピノッキオ その誕生から現代まで」展、2006(平成18)年の「森鷗外と美術」展、2009(平成21)年の「描かれた紀伊山地の霊場と参詣道」展においても、和歌山県の文化と歴史、また美術

と文学のつながりを示す重要な鍵として、その絵画作品や関連資料を紹介してきました。

今回寄贈を受けた作品群が、春夫の旧蔵であるということとともに、当館にとって意義深いのは、戦前の創作版画を考える上で重要な作家の作品が多く含まれていることです。当館は版画のジャンルを活動の柱のひとつに掲げており、継続して収集を進めているそのコレクションは国内有数のものです。戦前の創作版画に関しても質、量とも誇るべきコレクションを形成しており、そこに春夫の旧蔵作品が加わることで、さらに価値が高まることになりました。特にまとまって含まれていた川上澄生(1895-1972)と谷中安規(1897-1946)の一連の作品は、それぞれ創作版画の重要な作家でありながら当館では十分に作品を集めきれずにいた嫌いもありましたので、その部分が補完されることになりました。

順にふたりの作品を紹介しますと、まず川上は横浜に生まれ、旧制中学校の教師として赴任した宇都宮を拠点に、1920年代から1970年代にかけて活躍した版画家です。今回寄贈いただいた春夫の旧蔵作品のなかには、木版画14点が含まれていました。制作年は1926(大正15)年から1931(昭和6)年の間にまとまっており、うちいくつかの作品に関しては入手の経緯をたどることができました。

春夫と川上の間をつないだと考えられるのが、書籍の出版、編集を手がけた秋朱之介(本名：西谷 操／1903-1997)です*2。1930(昭和5)年、秋は五十沢二郎により設立された書肆「やぼんな(雅博那)書房」の仕事に協力し、そこで川上の詩画集『ゑげれすいろは』の刊行を手がけています。同書肆は春夫が責任編集を担った雑誌『古東多万』の発行元でもあり、そこで面識が生まれたのでしょうか、翌年秋は自ら書肆「以士帖印社」を立ちあげると、最初の仕事として春夫の『魔女』【図1】の出版を構想しました。同年、その準備中に春夫が秋に送った次の手紙は、秋から川上の作品が贈られたことへの礼状であり、さらに企画が進行中の『魔女』について、挿画を川上に依頼したい旨を伝えるものです。



図1 佐藤春夫『魔女』(以士帖印社、1931年) 個人蔵
箱 表紙(黒い部分に赤いガラス玉を嵌入) 挿絵：川上澄生

掲載作品のうち★を付したのが、2024年度に寄贈を受けた佐藤春夫の旧蔵作品



図2 川上澄生《〈伊曾保物語 天〉：にわとりと宝石》1931年 当館蔵★

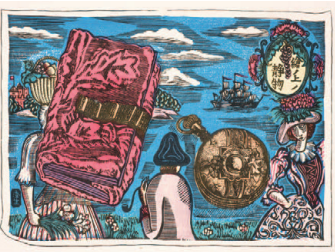


図3 川上澄生《絵ノ上ノ静物》1926年 当館蔵★



図4 川上澄生《洋燈とアルファベット読本》1926年 当館蔵★



図5 川上澄生《〈的〉三部作のうち：当る》1928年 当館蔵★

拝啓 川上澄生画伯伊曾保第一第二二回分一昨日に着うれしく拝見致し候ところ本日は亦別の三葉着この方はもつと素晴らしいと存じ朝から殆んど狂喜魅了されたるやの感あり平日の陰気な気分貴君の御厚情と画伯の芸術とによつて一掃され珍らしく晴々とした気分になり申し候まま人形芝居の序文今から書き初めるつもり故明日は発送出来ることと存じ升

三葉の中絵の上の静物最も傑出アルファベットのあゝもよろしく貴兄の御選択に服し候 先日御送附の会員募集之書を拝見致して川上氏の創作版画御申込する筈でしたが郵便局など面倒で御申込せずにおましたところ御惠贈に預り嬉しく存じます 先日の御手紙では的も出来の上は御恵ミ下さるとの事多謝そこで例の魔女に就き一案 魔女は拙詩だけでは少々内容貧弱故川上氏に装幀や挿画などを煩はしそれによつて意義あらしめたいと思ひます (一部抜粋、傍点編者)

—— 佐藤春夫「秋朱之介宛書簡」1931年2月11日付、『定本 佐藤春夫全集』第36巻(臨川書店、2001年)所収、書簡114

この手紙に記された川上の作品は、今回の寄贈作品のいくつかと合致すると考えられました。上から順にたどれば、「伊曾保」とあるのが〈伊曾保物語 天〉【図2】、秋が以士帖印社から刊行を手がけた版画集で、うち4点が今回の寄贈作品に含まれていました。「絵の上の静物」は、まさに同題の《絵ノ上ノ静物》【図3】、「アルファベットのあゝ」は、その作品が春夫の旧蔵コレクションに含まれていたという状況からも《洋燈とアルファベット読本》【図4】ではないかと推測されます。「的」は、3点組の〈的〉で、うち「狙う」と「当る」【図5】の2点が寄贈作品に含まれていました。うち「当る」の方には、イメージの右下に秋のものと考えられる「秋」印が押されています。作品は上記の手紙を送ったあと実際に届けられたようですが、残念ながら春夫はあまり気に入らなかったらしく、同年2月26日付の「秋朱之介宛書簡」(同前、書簡116)で、「版画的は余り面白くなかった」(傍点編者)と記しています。また同年3月1日付の「秋朱之介宛書簡」(同前、書簡117)に春夫は、「鶏

頭と猫児蛇苺の二枚計三枚有難く拝受猫は実に実に傑作也(中略)蛇苺はどうしていけないのかこれも小生には頗る気に入りました」(傍点編者)と記しています。この「蛇苺」は、ほぼ同図様ながら、右上の虫と左下の「澄」の字が色版で擦られた作品と、空擦りのみで表現された作品と、2点の寄贈を受けた《蛇苺》【図6、7】のどちらか、あるいはどちらにも該当する可能性が考えられます。

もちろん手紙にそのタイトルが記されていても、複数枚の制作が可能な版画ですので、同題の別の摺りの作品を春夫が入手していた可能性はないとは言えません。しかし、「秋」印が押された作品が含まれていることから、今回の寄贈作品が、まさに手紙に記された秋からの贈呈作品である可能性は高いのではないかと思います。とにかく、この頃、春夫は川上の作品世界を非常に好んでいた様子は手紙の文面からうかがわれますので、これらの作品はその様子を物語ることは確かです。



図6 川上澄生《蛇苺》1927年 当館蔵★
＊イメージの周囲は全て空摺り



図7 川上澄生《蛇苺》1927年 当館蔵★
＊イメージ右上の虫と左下の「澄」の字が色摺り



図8 谷中安規挿画、佐藤春夫『FOU』(版画荘、1936年) 当館蔵



図9 谷中安規《画想》1932年頃 当館蔵★
＊制作に耽る谷中自身の姿



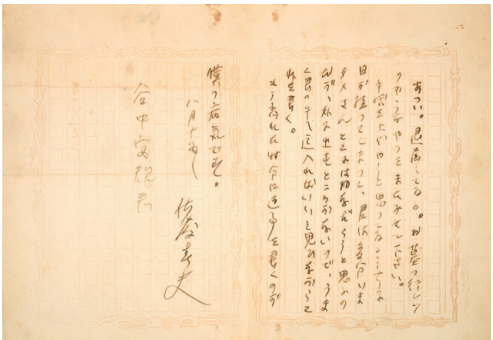
図10 谷中安規《文豪 佐藤春夫》制作年不詳 当館蔵★



図11 谷中安規[女性像]制作年不詳 当館蔵★
＊紙裏に「谷中安規」、台紙に「a.k. Jw. 3/24/20」と読める書き込みがある

図12 佐藤春夫《谷中安規像》1942年 個人蔵

図13 佐藤春夫「谷中安規宛書簡」[1925]年8月15日付 個人蔵
あつ。退屈してゐる。お墓の行レツのやうなやつをまたみせてください。手紙を上げやうと思つてゐるうちに日が経つてしまつて、君は多分いまタメさんとここにはゐな(い)だらうと思ふのだが、外に出すところがないので、うまく君の手へ迄入れたいと思ひながらこれを書く。もう忘れた時分に返事を書くのが僕の病氣です。 八月十五日 佐藤春夫 谷中安規君



もうひとりの版画家、谷中安規は、奈良県に生まれ、1920年代半ばから1940年代半ばにかけて東京で活躍しました。春夫の『FOU』【図8】などいくつかの著作の装画や挿画を手がけ、親しい交流を結んだことは、これまで開催された谷中の回顧展や、谷中、春夫双方の関連書籍でも示されています。春夫は、独自の幻想世界を表した谷中の表現と、飄々とした人間性を愛し、自著だけでなく、知り合いの文学者を紹介して活躍の場を広げるなど、その活動を物心両面で支えました。寄贈作品のなかには、谷中の木版画が17点【図9、10】、水彩画が1点【図11】、作品10点を挿んだ版画集が1点、版画1点を挿んだ版画誌が1点、自筆の物語原稿が1点、合計21点が含まれていました。個々の作品の細かな収集経緯はいまのところ確かめられていませんが、まとまって伝えられたこれらの作品が、ふたりの親密な交流の証とも言えます。

今回の展示では、その特別な交流をさらに深く示すため、春夫が手元に残していた谷中の作品とともに、谷中の手に渡った春夫の手紙や絵画【図12】を、ご関係者の協力を仰ぎ、一緒に展示することが叶いました。1925(大正14)年、ふたりが出会ったほぼ最初の頃に春夫が谷中に宛てて出した、「あつ。退屈している」といった、気さくな書き出しではじまる手紙【図13】もそのひとつです。

谷中は1945(昭和20)年、空襲で東京の自宅アパートから焼け出されたあと、近くの空き地に粗末な小屋を立てて暮らしはじめます。しかし戦争の混乱でこれまで頼ることのできた人との連絡がとれなくなり、かぼちゃを育てるなどしてなんとか自活を試みますが、十分に食べることができず、翌年栄養失調のためにその小屋でひとり亡くなりました。亡くなった時、ほかに持ち物がほとんどないなかにあつて、谷中が持っていた袋のなかにあつたのが、春夫や与謝野晶子、堀口大學などの文学者、また交流のあった版画家や版画誌の出版者などから届いた手紙や原稿でした。それらは空襲に遭い、彫刻刀さえ失ってしまっている状況にあつても、谷中が最後まで守り通し、その死を看取ったものです。互いが互いの姿を表した絵画が隣同士に並んだ様子をその象徴として、それぞれの手元から離れ、互いの手に渡って以来、およそ80年から100年を経た作品と手紙が、同じ部屋で邂

逅する機会を設けることができました。

ご寄贈いただいた作品には、川上と谷中以外にも、川西英など日本の版画家による1930年代を中心にした版画作品が多く含まれています。また武者小路実篤、里見淳と3人で共同購入し、80点あるシリーズをくじ引きで分けあったと伝わるフランシスコ・デ・ゴヤの《ロス・カプリーチョス》(5頁に展示風景)なども、版画史、文学史の両面からも興味深い作品です。なにより春夫の旧蔵作品が当館のコレクションに加わったことは、それを起点とした調査研究や展覧会など、今後の美術館活動の幅が広がることとなりますし、そのための大きなきっかけにしていかなければなりません。

最後になりましたが、当館へ大切な作品をご寄贈くださった高橋百子様をはじめ、展覧会の開催にご協力いただいた多くの方々に、改めて心より感謝申し上げます。(宮本久宣)

註

- *1 『「佐藤春夫の美術愛」展パンフレット』、和歌山県立近代美術館、2025年4月12日発行。当館ウェブサイトの展覧会ページ(<https://www.momaw.jp/exhibit/2025satoharu/>)からダウンロードが可能です。
- *2 秋朱之介については、秋朱之介『書物游記』(書肆ひやね、1988年)を参照。



右の壁に谷中安規《文豪 佐藤春夫》と佐藤春夫《谷中安規肖像》が並ぶ